

呉と軍港

アニメ映画「この世界の片隅に」を観てから、呉という土地に興味をもった。標題の『軍港都市研究』Ⅲ呉編の序章を抜粋して紹介したい。

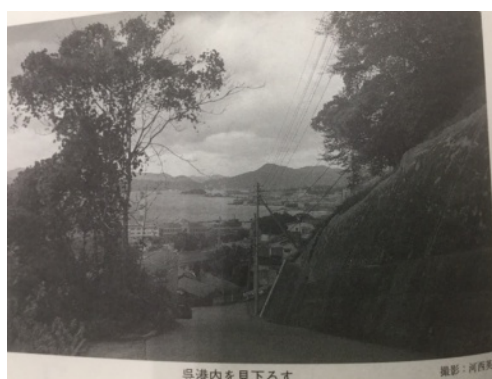
広島県の呉は1889年(明治22)7月の鎮守府開庁により軍港として歩み出す。1907年刊の『呉案内記』も序文で、「一朝海軍鎮守府が設けられてから旭の昇る勢で海岸一帯より山麓にかけて全く面目を改めた」とのべている。この間の1902年10月には呉市が誕生している。寒村から軍港へ。呉の変貌は明らかだった。わずか数千だった人口は市制施行後着実に増加し、明治末期には10万人を超える勢いだった。



1910年(明治43)刊の『呉』は「呉市は是れ海軍の賜なり」という地域意識を示しているが、翌1911年に刊行された『瀬戸内海論』は、「内海は我が海軍の根拠地、乃至策源地として、最上のものである」と論じている。内海に面する軍港として呉の唯一無比性を強調するとともに、軍港呉が多様な瀬戸内海世界を後背地に抱えていることへの着目だった。



軍港呉は活況を呈していた。1903年(明治36)に造船廠と造兵廠が統合されて呉海軍工廠となり、1907年には日本最初の装甲艦(巡洋艦)「筑波」、1911年には当時世界最大といわれた戦艦「安芸」、1915年に世界初の3万t級の戦艦「扶桑」を建造している。大正末期の人口は15万人に迫るが、呉市は軍需と軍縮のはざままで揺れ動いていた。そこから志向されたのが産業都市である。呉は「生産的な労働都市」だったが、きわめて軍事的閉鎖的な生産構造であり、地域産業全般の発展を誘発するものではなかった。非軍事的な工業の自立的展開は見られず、海軍と工場のもつ大量消費への依存は「底の浅い消費都市」としての発展しか意味しなかった。産業都市への道は遼遠であった。



昭和に入ると呉の人口は益々増え、1932年(昭和7)から33年にかけて20万人の大台に乗る。1932年3月の『大阪朝日新聞』(30日付)は「海国日本の誇り 軍港都市一大呉市」という見出しで、呉は「世界に誇るべき大軍港都市」であり、清酒・金ペン・万年筆などの「生産都市」としても発展著しいと報じている。人口が25万に迫った1935年には「国防と産業大博覧会」が開催されている。それを記念して呉市役所が刊行した『呉市と海軍』は、呉も全国10大都市の仲間入りをし、今や「東洋一の大軍港」と称されるに至ったと自負している。呉海軍工廠で起工された史上最大の戦艦「大和」が進水したのは、1940年のことである。アジア太平洋戦争真っ只中の1943年の人口は35万人を超えて、戦前のピークを迎えた。

しかし、軍港呉の栄華は都市一般の栄華ではなく、きわめていびつなものであった。敗戦後、「特異性都市」は崩壊し、平和都市へ転換するかのように見えた。しかし、海軍は海上自衛隊へ、軍事産業は重工業へスライドすることで残った。呉市の本質的な背景として、いまだ「海軍」からの自立しえない特異性を指摘できるのではないだろうか。

(2017年8月16日)